

時の過ぎゆくままに (6)

生はいとしき蜃気楼

(高成長期を追いかけた戦中派しんがり)



桐野 三郎

※ ンダモシタン

もう憶えている人もほとんどいないと思うが、せっかく宝くじで当たった二億円をそっくりそのまま、慈善団体に寄付して話題になった人がいた。

と、その一両日後の地元新聞の「ンダモシタン」欄に「どっちが気持ち良かったですか、二億円当たった時と寄付した時とでは？」という投稿があった。なるほど、せっかく当たった二億円をそのまま寄付、もビックリだが、どちらが気持ち良いだろうか。当たった時と

寄付した時では？ 僕はその投稿氏のユーモアセンスに感服した。

宝くじも、二億円当たれば僕らにとってはオンの字、青天の霹靂へきれきと言ってもいいぐらいの好運だ。天にも昇る良い気分だろう。しかしそれをそっくりそのまま寄付した時の気分、僕らの身分では想像もできないがこれまた素晴らしい気持ちではないだろうか。清々すがすがしい、とても言うしかないが。

当時、地元文芸誌「随筆かごしま」にエッセーを連載させて貰っていた僕にとつては、絶好のネタだった。だが、とは言っても清々しい美挙をそのまま誉めそやすだけではさすがに芸がなさ過ぎる。すぐ頭に浮かんでくるのがリッチな友人や知人が口にしたがるイヤ味、

「貧乏人に限って金を汚かいもののようにバカにしたがるけどね、この世の悩みの九十九パ

「セントは金で解決できる、というのが厳然たる世間の常識なんだよ」なんていうあのセリフだ。あれこれ思いめぐらせたあげく、僕が最後に決めたエッセーのタイトルは「残り一パーセントの問題」だった。

話題が、ことゼニカネの話となればやっぱり興味が湧くのだろう。エッセーの評判も良くて、新聞も一面のコラムで話題にしてくれた。

さて前置きが長くなったが、ところで何故、そんな大昔の話をいまごろ僕が、さも自慢げに持ち出してきたか、だが。これはもう皆さんご存知のこの春の東京都知事、マスゾエ氏の辞任劇だ。東大出の秀才といわれるオッサンが、たったあれだけの金銭をチョロまかした上に、何としても言い逃れようとする見苦しさ、繰り返しテレビであの情けない姿を見

ているうちに、ふと「昔はあんな清々しい話もあつたよなあ」とつつい古い記憶が甦ってきたというわけだ。

いや、それだけではない。この際白状するが、僕は内心に大きなコンプレックスを抱えながら長年生きてきたのだ。自分の経歴を書くとき、出身大学はともかくとして、学部名まで書く場合である。学部は経済学部、ウソいつわりはない。「お前は経済学部出身のくせに」とか「経済学部出身じゃなかった？」などと、若い頃から親父やおふくろに怒られたり皮肉られ、兄たちからは「経済学部で何を勉強したんだろう！」と露骨にバカにされてきた。妹たちはさすがに面と向つて攻撃はしないが「三ちゃんだけは何故あんな金使いが許されるわけ？」などと、何度嫌味を聞かされたことか。つまり「三郎はカネにルーズでだらしない」という烙印を、若いころから押

されていた、と言われても仕方がないのである。

でも、とは言っても親兄妹の大半はもう他界しているから時効だが、息子や娘はいまや壮年、孫も大勢いる。彼等に焼きついている僕という父親像は、もう長いこと聞かされてきたあの「カネにだらしない、甲斐性のない老いた父」でしかないだろう。事実、彼等の大学時代の学費の大半は奨学金やバイトで賄われてきたし、さらに二人の息子がアメリカの大学に行ったのも、ロータリー財団の援助だったことなど考えれば、とても「俺たちが苦勞して育てた」などとは言えはしない。しかし、それももちろん自業自得。この歳になれば今更イメチェンなどできるわけがない。僕はすでに観念していた。

とそこに、天から降って湧いたような舂添知事の辞任劇である。「他人の不幸は蜜の味」。

すぐ思い浮かべたのがこの言葉。とたんに僕の人生は再び明るくなった。

東大出の東京都知事のあのセコさに比べたら、自分のだらしないさなど屁でもない。良く考えれば恥ずかしいことなど何ひとつしたわけではない。親に貰ったカネが兄妹の誰よりも多かったのは単に他の誰よりも僕の交渉テクニックが旨かった、というだけの話だし、家庭を持ってからのカネ使いも大部分は取引先や友人、部下たちとの飲み食いだ。浪費、というより、人間関係円滑化のための先行投資という面が大きかった。しかもそのカネは盗んだわけでもチヨロまかしたわけでもない。まぎれもなく自分で稼いだカネだ。さらに言えば、そのために子供たちに多少の不自由をさせたことも、教育上はむしろ効果的だったのではないか。

マスゾエ辞任劇は、はからずも僕の永年の

コンプレックスを吹き払い、残りの人生に明るさを取り戻させてくれた。僕の好運はまだまだ続きそうである。

※ 人生は楽しむためにある

僕が職業意識に係る講演を聞いたのは、学業を終えて社会人になる前後、つまり戦後十年目頃。どこで何というセミナーだったかは覚えていないが、講師は東大教授だった矢内原伊作氏。

日本流の職業意識と欧米流のそれを対比させて判り易い説明だったから、粗筋だけははつきり覚えていて。大略、日本流のそれは例えば徳川家康の言の如く、人生は重い荷を背負って長い道を往くようなものだとか、二宮尊徳のように働くことこそ善なり、などと、まだ戦後の労働意識は整理されていない。それに比べると西欧社会では特に産業革命以後、

何を今頃、そんな分かりきったことを聞くか、という位はつきりしている。

それは「人生は楽しむためにある。楽しむためには金が必要。金を得るためには働かなければならない。労働とは喜びに至るまでに通り過ぎなければならぬ苦痛である」というのだ。僕は深く納得した。「よし、俺はこれからの人生、この欧米流で行く」と。

中でも強い説得力を感じたのが、楽しむためには金が必要—という、その金の多寡に関する説明だ。必要なのは *some money* (サム・マネー) つまりいくらかの金。人それぞれに楽しむために必要な額というわけである。

わが国では古来「豊かな暮らし」とはイコール「金持ち」みたいな常識がまかり通っていたが、真の豊かさとはこの人生をいかに「楽しむ」かにかかっているのであって、金はそ

の手段に過ぎない。社会人としてのスタート時点で、胸中にその考え方だけははつきりとインプットされた。

しかしそれ以前に、そんな考え方を受け容れるような人間性の核みたいなのが、自分の中に醸成されたのはやはり高校時代の美術部だろう。男女共学が始まったばかりの新制高校一期生。旧制中学と女学校が合併した直後だけに美術部教師が二人。鯨津、鮫島と、県下ではそこそこ知られた画家だったが、なんと鯨津先生は海老原喜之助画伯と独立美術の盟友、鮫島先生は吉井淳二画伯と美術学校時代の同級生。時折来訪されるこの著名画家たちと、時にはお茶など一緒に飲みながら、パリ画壇の話なども聞けるといって恵まれた部活だった。

美術室だけではないが、部屋の外壁は蔦に

覆われているため蔦の葉を通した緑の光が窓から差し込み、放課後石膏デッサンなどしているも、日暮れまで飽きることがなかった。もちろん美術部には美人部員が多かったせいもある。しかしいまひとつは、部屋に立ち込めていた、あのテレピンオイルの匂いのせいもあつたのかもしれない。同じ揮発性、テレピンにはシンナーと同種の効果があるので、は？ などといまごろになって思い出したりもしている。

しかも思えばそれよりほんの五年前は防空当番のために、その校庭に掘られた防空壕の中で恐怖に打ち震える夜を幾度も経験した、中学2年生だったのだ。それを思えばあの頃の美術部は楽園であった。



※ 糸の切れた凧のように

僕が生まれたのは三一年。日本が中国大陸に侵略をはじめて満州国が誕生した年だ。小学校入学直前の三七年には日中戦争にひろがり、四一年（小学校四年生）には太平洋戦争に突入した、という世を挙げて国民皆兵の時代。

どうせ徴兵を免れないなら海軍兵学校に行こう。その願望は早くからあった。先ずは海軍制服のカッコ良さ、それに海軍の方が強行軍などないだけに陸軍より楽チン。それ位の浅知恵だった。放課後は学舎（郷中教育）に通って角力や水泳に興じ、学校内では海洋少年団に入り、手旗信号やモールス信号などに熱中した。

という意味では、それなりに時代への適応能力は持っていたのかもしれない。その延長線上で当時軍人学校（海兵、陸士など軍人養

成学校への合格率が高い）と呼ばれていた中学にはいったのだから。さらにいま思い返せば、終戦の二年生時（四五年）には級長をしていたのだと思う。校庭では合同朝礼のとき先頭に立って、大声で号令をかけていたような記憶が残っている。つまり、あの年の八月十五日まで、僕の才能と努力は海兵合格という一点に向ってかなりいい線まで行っていたのではないだろうか。

だが、あの七一年前の八月十五日を境に、天と地がひっくり返った。まさかの日本敗戦である。突然、自由というままで吸ったこともない異種の空気の世界に放りこまれたのだ。新制高校発足までの四年間はまさに糸の切れた凧のように、その得体の知れない新しい空気の世界を浮遊していた。そのため校内学業成績も、ビリから数えたほうが早い位の順位まで下がったことがある。

それでいて、大学受験まであと一年となった高3になってからも、僕はまだ南日展に出品する絵に熱中していた。

「東京芸大を受験したい」と言い出したのは九月頃からだ。

「絵描きなんかになって飯が食えるわけがない」というのが親父の意見。「芸大なんかに入ったら学費は一銭も送らない」とまで言い切った。

父の意見にあまり抵抗しなかった理由は、学費もだが、万が一合格しても卒業後の職業がとりあえずは教職ぐらいだろう。というその教職という職業が、糸の切れた凧状態の僕にはひどく固苦しい仕事のように思えたからだった。

付け焼刃のにわか勉強で受けた在京大学に見事に落第。予備校入学のために上京した。

東京は駿河台にある予備校での一年間。正

直に言うが、僕が「努力した」と言えるのは生涯の中で（戦後では）この一年間だけ。振り返ってみてつくづくそう思う。もちろん、その後の実社会で仕事に熱中した経験は数えきれないほどある。が、それは全て賃金を得るため、仕事そのものを楽しんでいる部分の方が大きかった。という意味で努力したという記憶とはほど遠い。

しかも、努力したと言う一年間にも、下宿に帰る途上、新宿名画座に立ち寄っては二本立て洋画を観た記憶が何回かあるから、高のしれた努力だったに違いない。

※ 二つの大学に通った四年間



大学は経済学部を選んだが、その理由は結局「どっちに転んでもツブシがきくように」という程度によくあるケース。つまり「これで飯が食える」という、人並み以上の才能が

何ひとつなかった僕の選択だった。

それでいて、一年先に芸大に合格していた親友には「お前なんか絵という才能しかないからいいね。迷わずに済むから」などと憎まれ口を叩いたのを覚えている。「俺なんか才能が多すぎるから迷うんだよ」などと。

そんな大学時代を、出席率から先に振り返れば、一年次が6割、二年次5割、三年次3割、四年次2割、という程度の尻すぼまり。

無論、入学当初はそこその向学心はあった。殊に歴史を誇る学内図書館などは入学前からの憧れだった。でもそこそこ出入りしたのは入学した年の夏ぐらゐまで。

読書に飽きた頃、館内で学友たちと話題になった。人間一生のうちに何冊ぐらゐの本を読むものだろうか、と。

「知識層といわれる人たちで、普通、二、三千冊、多くてもせいぜい五、六千。大学の先

生など、本を読むのが仕事みたいな人達でさえ二、三万冊が限界だろうと聞いたことがある。」そう教えてくれたのが横浜出身の級友だった。

「じゃ、一生かかってもこの館内の一パーセントの本も読めないわけか！」と、匙を投げ出すように大きな伸びをしたのが大阪出身の男。当時、図書館の蔵書は七十五万冊と聞いていたからだ。横浜出身が続けた。

「だから昔から言うじゃないか。先ずは自然から学べと。次は先人からだよ。つまり古老とか先輩や先生さ。三番目が本からだよ」

この日を境に僕の図書館通いは激減した。だが、この日の記憶がはっきり残っているせいだろう。最近でも「本を読め」という、いわゆる知識人がやたら多いのが気になって仕方がない。「違っだろう、先ずは自然からだよ」と反発したり、たまには「自分は一体何冊読

んで、偉そうなこと言ってるんだ？」などと腹の中でつぶやいている。

話が脇道にそれた。で、話を元に戻して、大学をサボって何をしていたかだが、まず最初は自分の大学をサボって上野の芸大に遊びに出かけることを覚えた。酒匂という親友と校内の美術室や彫塑室ほか、上野公園内にある美術館や博物館めぐりなど。でもしばらくすると同じ芸大でも、美術部より音楽部の方が美人が多いという理由で、道路ひとつ隔てた音楽部のコンサートには入り込んだり。思えば芸大の校内食堂ではツケが利くぐらいだった（酒匂名で）からかなりの頻度だったのかもしれない。

アルバイトは家庭教師をほんの数回。進学を狙っての依頼ばかり。でも、とても進学させる自信の持てるような子供とは思えず、途中で逃げ出す理由を見つけないのに苦労した。

一番長かったのは画家の家に下宿していた一年半。家主のアトリエに通っては、彼の代わりに教えることもあったが、大半はその生徒たちと仲良くなつての遊び、が多かった。

マージャンやダンスも覚えた。ジャズ喫茶にしけこむこともあったが、何より増えていったのが呑み屋通いだつた。とりわけ新宿は駅の南口に近い「リラ」という居酒屋は、僕にとつて特別な存在となつた。四年間に通つた回数は大学に通つた日数に匹敵するほどだつたと思う。

リラに最初に連れて行ってくれたのは芸大の酒匂だつた。そしてその夜まつ先に会つたのが常連だという東大生（といっても旧制の）二人。なんと同じ鹿児島県で、しかも同じ中学（といってもお二人は旧制）の先輩だという。その上、二人とも、僕が子供の頃から目ざしていた海兵帰りだということではないか。最

初の夜から、どこか因縁めいた引力に囚われたのも無理はない。

呑み屋といえはその頃から、新宿にはピンからキリまで星の数ほどあった。リラは勿論キリの方。飲み物は一杯三〇円のブドウ割るか梅割りの焼酎がほとんど。食べ物なんぞほんの数種の簡単なものだけだが、なにせ商売は、自分の母親と同じ年頃のおばさん一人で仕切っているのだ。七、八人の客で一杯、十人もはいれば超満員という店の、その気安さがおのぼりさん同然の僕らには有り難かった。リラのおばさんには美人の娘さんが一人いた。女子大学に在学中で店を手伝うことなど殆んどなかったが、その友達なんかと連れ立ってたまに店に遊びに来ることはあった。学生客の多い店にとっては、それもひとつの魅力になっていたかも知れない。

しかし、僕自身にとってもそうだが、あの

店は客が客を呼んでいた。つまり、今夜は多分来ているであろうあの人と語りた、或いは話を聞きたい、等々。今振り返っても多くの人にとってそんな存在だったような気がしている。

長老格の客としては直木賞作家の榛葉英治しんばさんや杉森久英さんも時折顔を見せていたし、その他美術や音楽、マスコミ系や、それを目指す大学生などという男女がたむろして議論などしていることが多かった。

しかし、ではおばさん一人だと退屈するのかもしれない。かといえ、それが又とんでもないのだ。日本文学もだが、お茶やいけ花に映画や演劇など造詣の深さには驚かされ、退屈することなど一度もなかった。忘れもしない、歌舞伎を僕がはじめて見たのもリラのおばさんに連れられてだった。

大学の同級生のほとんどが就職もきまり、卒業を前にそわそわしているときも、僕は学校をサボって落ちついていた。

どう考えたって出席日数が規定よりはるかに少ない。誰が考えても卒業できるわけがない。そう決めて、留年を覚悟していたからだ。

ところが土壇場で担当教授に呼び出された。「残念ながら、出席日数が大幅に不足してますね」と案の定、予想通りの宣言。

「はい、覚悟していました。仕方ありません」と僕も素直に返した。

ところが意外にも、教授は「でも試験の成績は合格圏内なのに勿体ないですね。欠席が多かったのには、それなりの理由があったんでしようね？ アルバイトで忙しかったとか・・・」と、まるで誘導尋問のように続けられるではないか。

意外な展開にはびっくり。でもここで誘導

に乗らぬ手はない。ぼくは期待を押し殺して、極力まじめな顔で答えた。

「もちろんです。地方から出て来た者にはいろいろと・・・」

一呼吸おいて教授は宣言した。

「では出席が足りなかったその理由を、書類にして提出しておいて下さい」

卒業が決まった日は飛び上がるほど嬉しかった。一年間の丸儲けだ。だが、またすぐ気になり出したのが、借金の整理。もちろん家からの送金も卒業となれば、若干の上乗せは可能だろう。問題はリラにたまっているツケの残額である。

もちろん最初の頃は僕も現金で飲んでた。それがいつしか、おぼさんの家族みたいな感覚で甘えるようになり、ツケが当り前のようになっていたのだ。でも卒業が一年遅れるの

だからゆつくり考えればいい。そう考えていたのに、突然決まった卒業。ツケの残額はとも若干の上乗せ程度で済ませる額ではないはず。

しかし、卒業できた報告かたがた、まずはツケの残額を聞かないことには始まらない。

その夜、卒業の報告にはおばさんはもちろん、常連客数人も祝盃を挙げてくれた。しかし他の客の前でツケの残額など聞けるわけがない。おばさんと二人きりになれたのは終電近くになってからだ。僕の肝腎の質問に、笑いながら、帳面を取り出して示してくれた金額は予想どおり。といっても当時の学費、三年分ぐらいの額である。

しかし、こちらが返事を探しているうちに、おばさんが言ってくれた。

「でも、これ全部桐野ちゃんの卒業祝いで消しておくから、ゼロよ」

ところでこれを今、僕は記憶を頼りに書いているが、戦後六年から十年頃までの話だ。新宿にはまだ戦争の傷痕があちこちに見られ、駅のガード下では白衣の傷病兵がハーモニカで「異国の丘」を吹きながら通行人に喜捨を乞うていた時代である。

リラのあったあたりも、今は高層ビルの立ち並ぶ近代都市と化して往時を偲ぶよすがなど何ひとつ残っていない。書いている自分でもふと、「あれはひよつとすると盛気楼ではなかったのか？」と思えてくるほどだ。

だが、先年、ノーベル賞を受賞された赤崎勇氏も、その同級生で、新聞紙上で語っておられた財界の海江田順三郎氏も僕らの中学の先輩。僕らがリラで薫陶を受けた栗脇さんや吉満さんたちとご同級だったはず、と考え合わせれば夢や幻であったはずはない。

だから僕はいま想うのだ。四年間に二つの大学を卒業したと。いや、それ以上を学ばせて頂いたのかもしれない。

そしてリラのおばさんは、僕にとってはすくなくとも大学の教授と同じような存在だったと。

※ 怪我の功名

学業を終えて郷里に帰ってきたのは、元々かごしま大好き人間だったせいもあるが、東京でだけは絶対に暮らしたくないと想っていたからだ。

国電の混雑ぶりである。まるで家畜でも押し込むように駅員が渾身の力で客を電車に押し込む、毎朝あんな扱いを受けて職場に通う。そんな人生なんて真平ごめんだ。早くからそう決めていた。

老舗の百貨店に入社した。最初の配属が一

階の販売課。一年経って主任となったのはいが、同時に早くも出張を命じられたのには驚いた。

「神戸は三之宮にダイエーというスーパーマーケットなる形態の一号店が出現したから、お前はとくと見て来い」というのだ。その社長は神戸三中出身で、中内功というフイリッピン戦線の生き残りということまで知らされた。というのは、当時のわが社の副社長が神戸三中の出身で、中内功はその後輩というわけだった。戦後も十二年が過ぎ、日本経済がまさに、急成長に突入しようという時代である。

ダイエー一号店は焼け残った映画館を改装した、だだっぴろい空間に粗末な販売台をたくさん並べ、その上に食品をはじめとする日用雑貨が山盛り、といってもいいぐらい豊富に積まれていた。いまはそれ位の記憶しか

残っていないが、ウリはもちろん破格の廉価。それは新しい時代の到来を感じさせるに充分だった。

しかし同じ頃、僕は労働組合の執行部入りといういま一つの役割を負わされることになってしまった。集会での発言が導火線になったのか、いわゆる祭り上げられたという形。自分では予想もしない成り行きだったが、ほぼ一千名の組合員に早く馴染むためには悪くないかも。そんな気もして引き受けた。

まずは教宣部長という役割だ。賃上げ交渉や三六協定（主に労働時間などを決める）など、たまには夜を徹しての交渉でも、会社経営の実体が丸見えになってくるのが興味津々で、疲れなどほとんど感ずることがなかった。

会社側は副社長をトップに専務、常務、監査役以下人事、労務課長など七、八人。組合側も委員長や副委員長、書記長以下ほぼ、同

数だが、いまの時代では想像できないぐらい議論が白熱したのには、やはりあの時代ならではの背景があった。

七十一年前、六月のあの上空襲で七階建ての社屋は、外壁だけはなんとか焼け残ったが店内はほぼ全館が丸焼け。全国百貨店の中でも被害状況は最悪、という中からやっと立ち上がりかけた時代だった。国鉄や公共団体のように要求貫徹のためにはすぐストライキ、などとやっていたら双方自滅以外にない。その認識だけは共有しての交渉。それだけに左よりの国鉄や官公労組などから見れば、軟弱な労使協調主義に見えたかもしれないが、お互いに腹の底まで見せ合っただけのあの経験は、いま思い起こしても貴重な体験だった。

教宣部長としてはタブロイド版の組合機関紙「あしなみ」を創刊した。新しく選出した編集委員を束ねての不定期刊だが、一面、組

合側を代表する意見欄でもあった「アンテナ」と名づけたコラムは、ほとんど自分で書いたような気がする。

執行部入り二年目には書記長に就任した。

そして三年目には同系列、数社の労組を束ねた連合体の中央書記長。「やりかけた仕事を投げ出すわけにはいかない」という思いだった。

しかしその頃まではまだ販売主任という責任を背負ったままの組合活動だ。

百貨店売場は、絶えずと違って良い位何らかの催事を実施する。その度に売場の配置替え、つまり、販売ケースを催事の規模に従って移動させる。かなりの肉休労働だ。さらにそれが終わると商品陳列や正札等も整えなくてはならない。

そんな仕事の計画立案から実施までだから、売場主任の仕事もハンパではない。それにプラス組合役員としての仕事だった。加うるに

半期毎に本決算、中間決算などという深夜までかかる年中行事もあれば、大晦日ともなれば初商の準備のために元旦の朝帰りになるのが恒例となっていた。

いま振り返っても、生涯で最もよく働いた時代だったと思っている。それでいて、残業が終わった後など仲間うちでよく飲みにも出かけていた。給料の上昇率もやがて「うなぎ昇り」という状況に近づいていたのだ。

組合役員も、三年経っても辞めるわけにはいなくなっていた。

系列事業所も夫々に単独の労組を結成しているのだが、百貨店だけでも鹿児島市の本店の他に宮崎、川内があったのに、さらに日南、人吉の店舗が出現し、それぞれに単組を結成して連合体に組み入れなければならない。

四年目には中央執行委員長に就任。同時に販売部門から離脱、組合事務所で専従として

その任に当たることになった。

もちろん連合体は百貨店ばかりではない。大手電気会社代理店、冷熱機器の施設会社や卸部門の商事会社、さらには食堂会社など、小さな単組まで入れれば九単組、組合員数は二千人をゆうに越える組織になっていた。

僕が労組活動からの引退を決めたのは、入社後七年経った頃だ。どこから耳に入ったのか、副社長室に呼び出された。

「委員長を辞めるそうやな」

関西出身の副社長は関西弁で押し通していた。「そうだ」と答える僕に

「それで、後任は誰がやるんや？」と聞く。

「いや、それは組合側の問題。事前に会社に報告の義務はないでしょう」

という僕の言葉に、副社長は笑いながら言葉を重ねた。

「固いこと云うな。企業の未来を憂える一同僚として俺は聞いているんや」

僕も笑いながら答えた。何も隠すほどのことでもないからと、名前をつげた後に、

「オトナの話し合いのできる男ですから、心配は要りませんよ」と。

が、そのあと、

「永いことご苦労やったな」と、組合運動の労をねぎらってくれたのには少々驚いた。振り返れば交渉の途中では、失言した会社側の揚げ足を取るようなことを言ったり、自分でも後になって言い過ぎたと思うような、過激な発言など数えきれないほどあったことを思い出すからだ。

だが、そのあと続けてくれた副社長の言葉にはさらにびっくりした。

「一生に一度だろうが、委員長辞任後の勤務地について希望があったら言ってくれ」

僕もこれには素直に申告した。

「いま一度、鹿児島を離れて、中央から鹿児島を眺めてその未来を考えてみたい」と。

東京事務所長として上京したのは、その半年後だった。



※ 仕事も遊びも楽しんだ結果は？

東京事務所勤務は六四年のオリンピックの年を挟んでの三年間。端的に言って、良く働きたるき良く遊んだ時代だった。

仕事はもちろん三十歳台に入ったばかりの働きたるきで当然だが、遊びの方は高校、大学時代の友人が多かったのと、場所(事務所)が六本木に近い西麻布(当時は麻布霞町)だったことも幸いした(災い?)かもしれない。

しかしこの遊びについては本誌十一号にも書かせて貰ったから省略するが、仕事の方は、いまや百貨店も高度成長期、売場拡張のため

通産省への申請が各社から相次いだ時代である。当然わが社などまっ先にその必要があった。幾度も、増築の申請をしては、その都度説明のために通産省に足を運ばなければならなかった。

同時に先進の百貨店では合理化を急いだ時代でもあった。わが社でも、まずは西武百貨店を中心とするJMA(通称ジマ)なる共同仕入機構に加入、次いで伊勢丹を中核とする十一店会という共同仕入組織に加わったりもした。

いや、そればかりではない、伊勢丹(新宿店)では二週間も僕自身、一階の売り場に立って販売の実務に参加、百貨店の裏側まで勉強させて貰ったと言ってもいい位だった。

東京に取引先は無数にあるが、仕入業務は本社から出張して来る担当責任者や、東京所員がやるから、僕自身がやることは殆どない。

見るのは様々な展示会やファッションショーなど情報収集が主。他には百貨店協会を中心とする他百貨店とのおつき合いなどだ。

しかし実はそれら以外にいま一つ、所長として細心の配慮を要する仕事があった。本社から上京してくる役員たちのお守り役。つまり秘書係である。

社長は毎月上京。ほぼ一週間の滞在だ。副社長、会長などが凡そ一ヶ月に一回、その他、常務や営業部長などが随時、という頻度だが、出張中ともなれば会社内での上下関係とは違った空気が生まれるとでもいうか、急速に親近感が深まって行くようで、僕にとってはむしろ楽しい仕事だった。

とりわけ社長は出張の回数も多いが、滞在日数も長い。その上、就寝時間以外は全て、といってもいいぐらいに側にいる必要がある上司だった。それでいて、お高く止まった所

など全くない鹿兒島弁が、温厚な人柄を滲ませていた。

帝都ハイヤーで羽田まで迎えに行くと、帰りの社中で後部席から助手席の僕に

「さて桐野君、今日のヒルメシは何を食おうかね？」と、まず声がかかる。「天ぷらなら銀座の天一でしようがトンカツなら日本橋の・・・」などと、僕も期待をこめて返す。

定宿は帝国ホテル（もちろん当時は旧）だが、研究のためと称してオークラほか、赤坂界隈のホテルに投宿されることもあった。

社長の交友関係は素晴らしい人が多かった。財界人や取引先の社長などもだが、吉井、海老原といった画家など、いわゆる文化人などとの交流も広がった。もちろん僕も、そんな方たちとの会食に陪席させて貰う。

顔が広がる。世間が見えてくる。百貨店を中心とした日本の物流のあらましが分かって

くる。等々、東京勤務はたしかにおいしい仕事だった。百貨店という業態を中心としての事だが、日本物流の長所や欠点も良く分かり、今後益々増大するであろうスーパーもだが、その後を追いかけてくるコンビニなる店舗のチェーン展開なども要警戒であるなど、次代の流れはひしひしと感じていた。

世代の交代時期でもあったのだろう。築地の東本願寺で挙行された三越社長の葬儀にも参列したが、やっぱり忘れ難いのは西武の堤康次郎氏の葬儀だった。

場所からして自前の鉄道路線にある、これまた自前の豊島公園。その中の体育館内にずらりと並んだ焼香台の台数は、はるか遠くまで霞んでいて、数えきれないほどだった。

「これで集まる香典料は一体いくら位になるんだらう？」

「それもだけどき、今日の弔問客はほとんど

全部西武線利用だぜ、電車賃だけでもヘタな百貨店の一日の売り上げ位は上がるんじゃない？」などと、参列した百貨店関係者たちも、葬儀の壮大さに驚きの表情でささやき合っていた。

と、ここで、百貨店と直接の関係はないが、豪勢な堤康次郎の葬儀から時を経ずして行われた、あまりにも対照的ないまひとつの葬儀を紹介しておこう。

小泉信三先生、今上天皇のご養育係もされた方と言えば皆さんご承知のはず。小泉先生とわが社の社長、副社長はご昵懇の仲。二人にとつては出身大学の学長でもあられたわけだが、とりわけ副社長は学生時代テニス部で活躍したが、その時代のテニス部長でもあったのが小泉先生。お忍びで先生が来鹿された折も必ずわが社の副社長がお供するという程の間柄だった。

その小泉先生の葬儀が行われたのが、青山齋場。参列者はあの広い齋場の入口で係員に差し出される一枝の玉串を黙って受け取るだけ。香典や記帳ほか受けつけは一切なし。つまり誰が訪れたかも分からないわけだ。

だが、掃き清められた広い齋場に延々と一筋の列を作り、神殿の前で玉串を捧げては、また肅々と長蛇の列をつくりながら去って行く。あの光景は美しい感動的な絵として今でも僕の網膜に焼きついたままだ。

さて、先を急ぐが、鹿児島の本店一階の販売課長として東京から帰任したのが六六年。景気はまだ上り坂の時代である。

着任して二、三日たった頃だった。売場を通りかかった財務担当の常務（後々の社長）に声をかけられた。鹿児島弁丸出しで誰からも親しまれている上司である。東京での労を

ねぎらってくれたのはいいが、その後に、

「どうせ君のこつじゃが、仮払いほどしけなつたか？」と聞かれたのには驚いた。仮払いとは会社に対する未払いの金、つまり会社からの借金残高はいくらになったか—というわけだ。

「正確には覚えていませんが—」と僕が答えたのは、凡そ三年間に貰った給料総額に匹敵する額である。

が、常務が笑いながら口にしてくれた言葉にはまたしてもびっくりした。

「え、そこで済んだか。君にしちや上出来じゃったが！」

僕は、笑いながら売場から去って行く常務の後姿に、思わず最敬礼していた。

世はまさにゴルフがはやりはじめた時代でもあったのだ。全国百貨店の、東京事務所所長の連絡会などでもゴルフを兼ねての会が多

かった。

事務場所のある西麻布から至近距離にある砧ゴルフ場まで、タクシーで行っても片道五百円、プレー費も一ラウンド千円で回れた時代だ。

コース脇の練習ではプロ志望の樋口久子に、中村寅吉が指導する姿が見られた頃の話である。

※ 上出来の収支とんとん



本店一階の販売課長は六九年春まで、わが社だけでなく、日本中の百貨店成長がピークにさしかかろうという時期だっただけに、またしてもわずか三年での転勤に驚いた。

系列会社の中に、大手電機メーカーの系列販売会社代理店があるのだが、ちよっと前までは系列会社の中でも最高のボーナスを羨ましがられていたのに、東京オリンピック後

ブームが去ってピンチ到来。不良在庫の山を抱えて、たいへんだから急遽立て直せというのである。

電機といっても通常われわれが目にするのは、いわゆる百貨店店頭に並んでいる家電(家庭電気製品)だが、当社では家電部の他に機器部や施設部があつて、モーターやポンプなど機械屋さんや工事屋さん相手の商売もやれば、エレベーターやエスカレーターなど、設計事務所や建設屋さん相手の営業も行うのだ。もちろんそのアフターケアのためには技術にすぐれたサービス部門も充実させなければならぬ。それを、百人ちよつとの人員で賄わなければならないのだ。

商品知識等については全くと言っていいほどの門外漢。古参社員には、労組活動時代の縁で多少の触れ合いがあつたとはいえ、ほとんど初見参。それに年長の役職者、監査役や

調査部長などがおられる中に取締役営業本部長としての赴任である。

しかし僕は喜んで引き受けた。実は本社財務担当常務から内命を受けていたからだ。

「荒療治でいいから思い切りやってくれ。単年度の損金はいくら出しても本社が引き受ける。従業員の首も、役職や年令に拘わらず何人切っても構わない。これも本社で引き取るというのだ。この条件なら誰だってOKだろう。それに、勤務場所が百貨店という箱の中から飛び出して、自由に青空の下を駆け廻れる、そんな開放感もあった。

販売会社の本社はもちろん鹿児島市（いづろから後に谷山二号用地に移転）だが、奄美大島をはじめ川内、鹿屋、栗野、加世田に営業所を置き、規模に応じた社員に車輛、そしてそれに応じた在庫を抱えているのだ。さらに大きな取引先の倉庫に眠っている在庫もあ

る。しかも当時県下の取引先は口座数だけ数えても五百社以上。

そうだ、いま電気屋さんといえば、超大型の今風の店舗しか想像できない方が大部分だろうが、どんな小さな町にも、夫々のメーカーの看板を揚げた電気屋さんが一軒や二軒は必ず存在した。そんな時代が、ついバブル崩壊までわが国にはあったのである。

不良在庫一掃は難しい仕事ではない。本社倉庫ばかりか各営業所はもちろん、必要な場合は取引先の倉庫まで所長たちと見て廻る。

例えば正価十萬円の旧型品もしくは傷物（少々難あり）品を「これはいくらでなら売れるか？」と問えば「八万円なら売れるのでは」と答える。そこで間髪を入れず「はい、では五万円。今週中に売れ！」と即決する。

ほぼ二年足らずで全県下の在庫の内容は一新した。もちろん算出された損害金額の大き

さにオロオロする監査役など尻目に―である。

百貨店本店から「百貨店に復帰の希望があればポストを用意する」と伝えられたのが四年目。

だが、「まだやりかけの仕事が多すぎる」を理由に即、断りを入れた。

やりかけの仕事は嘘ではない。人員整理も終わりスリム化は実現していたが、教育訓練や賃金体系など改革しかけた仕事は多かつた。しかしそれもだが、日本有数の電機メーカー相手とのケンカ（といっても良い位、言い合っていた）など、つまり仕事自体が面白くなっていたし、新しく需要の増加してきた配電盤工場（後に常務に就任）の設立準備などに追われていた。

もちろんその間に、僕が仕えた百貨店社長も、次いで社長に就任された旧副社長もすで

に他界されていたことが、僕の百貨店への興味を半減させた一因だったと思う。

僕がサラリーマンを辞したのは、それからさらに四年後、四十五歳になっていた。

「俺の人生、これでいいのか？」

ふと、そんなことを考え始めたのが一年前からだった。

百貨店で十三年間、関連の代理店勤務八年、計二十一年間。しかも現状は二つの役員ポストを兼ねて、これまでの中では最も恵まれた状況。そつなく日常業務を続ければ少なくとも定年までは―。

そんな計算もしなかったといえはウソになるが、やはり「ここは俺の居場所ではない」というのが、一年考え続けた末の結論だった。

僕の辞職騒ぎが一段落した頃である。

机周辺の後片付けをしていた僕に、経理課

長が申しわけなさそうな顔で近づいてきた。

「ほんとに申し上げにくいのですが・・・」
と口ごもる前に、僕の方から切り出した。

「退職金だろう。赤になった？」

「いや、赤にはなりませんけどほとんどゼロになります」と答える。

「そりゃ良かった。ほっとしたよ」

そういう僕の笑い声に、彼もほっとした様子でぺこりと頭を下げた。

彼とは二人だけの約束があったのだ。接待交際費の使い方だが、代理店業界でも高成長時期とも重なって飲食の機会が多かった。何せ取引先が多い、殊にやゝ大手の電材店、工事屋さんなど情報交換の意味も含めて会合が多い。会社宛に届く請求書も僕関係だけでも月に十枚は下らなかつた。もちろん中には社内下部達との飲食もある。中には公とも取れるが私といわれても仕方がないものもある。

当初はその区分をいちいち明確にしていたが、途中から僕の提案に従って貰った。つまり、僕関連の請求に対しては会社に一括して全部払って貰うが、その半分は後に僕の給料から差し引くと。

「それじゃ本部長が大変ですよ」と心配する経理課長を押し切ったのは僕である。もちろん、東京事務所時代の借金まで含めてのことだが、サラリーマン時代を通しての収支とんとんは僕にしては上出来だろう。

人生を楽しむために必要なのは「サム・マナー」。サム・マナーとは人夫々に必要な額のこと。それだけは僕も稼いだのだ。マスゾエさんみたいにセコイことはしないので。

※ いとしき日々



高橋真梨子の歌に出てくる「マリー」の居所は五番街だが、僕がオープンさせた。ハブ「マ

リー」は高見馬場。商工会議所ビル横の、六階建てビル（二幸ビル）の三階だった。

サラリーマン引退一年後、資本金一千万円の小さな会社マリー産業（株）を創設、飲食業一号店のつもり。社名も店名も女性名にしたのは百貨店業界トップ伊勢丹の、戦略第一「先ずは女性を引きつけることを考える、男は二の次、三の次でいい」が、頭の隅にあつたから。出資には身内以外にかつての僚友や同級生など三十人以上が参加して貰つてのにぎやかなスタート。もちろんその他の創業費用は計画書を銀行に提出してすべて借入れである。

当時のパブとしては赤レンガ造りの室内に、グラランドピアノを取り巻く大理石のテーブルを置いたりした、ちよつと小洒落た雰囲気が目新しかったりして滑り出しは上々だった。

百貨店の社長（四代目）ばかりか東京・大阪

の取引先社長たちまで案内して来てくれたり、高見馬場に、ちよつとしたブームが沸いたといつてもいいぐらいのにぎわいだった。

ピアノにこだわったのは往年のアメリカ映画「カサブランカ」の、ハムフリーボガード扮するリックの店が、計画時から頭のどこかにあつた。黒人ピアニストのサムが「時の過ぎゆくままに」を弾くあの場面である。

以来、僕のマリー産業経営は、十六年間（途中で営業形態をダンスもできるように風俗営業許可を得るため、後半は屋号をパブ「ワシントン」に変更）。二十世紀も終わりに近づいた九四年まで、昭和も変わった平成六年に閉鎖、解散した。

日本経済のバブルが崩壊、ビルの持主が変わり建て直しが決まったのを機に、還暦を過ぎた年齢も考えての結論だった。

で、商売としての（つまり経済学部卒とし

の) 最終的な成否は? と問われそうだが、これはもちろん「大成功」などと即答はできない。

いや、それどころか、途中でピンチに見舞われてこずったこともあったが、これ又例によって例の如く終わりは収支とんとん。株主の皆さんにも、ご迷惑をかけることなく幕を閉じることができて幸いだった。しかも最後には名残を惜しむ常連客の皆さんに、「お別れの会」まで開いて頂いてーである。

しかし、後になって気づいたことだが、マリー時代はたしかに十六年間だけだが、僕にとっては、その後の人生のほとんど全てが、あの時代に決定づけられたようなものでもあった。

「随筆かごしま」の上籩義之さんがあの店にやってきたのは、鹿児島で本を出版するなら「桐野という男に書かせてみなさい」とMB

C 役員の東真人さんが言ってくださったからだったらしい。一昨年「昭和は遙か雲のうへ」という本を南日本新聞社から出版された東さんである。天文館は文化通り東端の「金平」(今は立派な料亭になっているが大昔の)でよくお会いしていた先輩である。

ところで義之さんにおだてられて書きはじめた連載「商人往来」を、これまた「面白い、面白い」とおだてて下さったのが、当時女子短大の教授だった児童文学者のたかし・よいち先生である。

タウン情報誌「ぴつく・あつぷ」を主宰されていた保ゆかりさんもお得意さまの一人だった。誘われて書きはじめたのが「男のつぶやき」だったが、続けて「外野席」と題して最終回まで百三十回以上続いたのでは?

そんな流れは地元新聞社にまで伝わり、「はーふたいむ」と題したエッセーと絵を、百回

も書かせてもらい、やがて正月元旦号の小説まで。

もちろん、わが愛する「セイ談会」との縁も、サラリーマンからパブ経営への転身がなければ、あり得なかつたわけだ。

そのせいだろう。あの店、マリーを振り返るたびに、抱きしめたくなるほどの、いとしい日々が甦ってくるのは、ぬるま湯の、サラリーマンからの脱出は正解だった。

ところで、バブルの崩壊はまた、別の意味でもひとつの時代の終焉だった。

フィリピン戦線で死線を乗り越えて神戸に帰ってきた中内功氏が、スーパー・ダイエーを引っさげて日本小売業界を席卷。遂に年商一兆円を超えるという日本一の金字塔を立てたのには誰しもが驚いた。

だが栄光は一瞬、バブル崩壊と共にやがてその座から滑り落ちていったのだ。というそ

の時代の軌跡が僕らの時代と重なるのだ。

あの戦争での犠牲者はおよそ三百万人。その中核をなした戦中派の生き残りが中内功氏だとすれば、間一髪で生き延びることができた僕らは、戦中派のしんがりと言ってもいいだろう。例えは悪いが、ポツカリと大きな穴が空いたような戦後の働き手不足のお陰で、僕らが伸び伸びと仕事をやらせて貰った、そんな世代でもあったというわけだ。存分に働いた、もちろんそれもあるが、存分に楽しませてもらった、という実感の方がはるかに大きい。

でも、いつだったか。

「これで僕らも借金ゼロ、遺すべき資産もゼロ、理想の形で人生を終われそうだな」とうっかり口を滑らせたとき、ぴしゃりと家人の口から出てきた言葉には驚いた。

「そんな話、私の前では良いけど、他人さま

の前では言わないでね。恥ずかしいから」なるほど、と、僕もあえて反対しないことにした。「どうやら俺の欠点は世間の常識を知らないことらしい。でも、彼女の欠点は、この世には間違った常識も多いことを知らないことでは？」と、首をひねりながらである。

近ごろカラオケに出かけることが多い。もちろん家内同伴。彼女もかなり上手になった。よく選ぶ曲に「時代おくれの酒場」がある。あれは「マリー」時代の苦労を思い出しながら歌っているのだろう。そう思いながら僕は聞いている

という僕が近頃おぼえたのは「旅の終わりに」というド演歌だ。

旅の終わりに見つけた夢は

北の港の小さな酒場

そこら辺の歌詞に心引かれて―である。思

い出すのはもちろん六十年以上も昔の「リラ」だ。北の港にもリラの花は咲くのだろうか？
そういえば、

これもどこでだったか、誰の言葉だったかも忘れたが、わりと最近、目に入るなりストンと納得した言葉があった。

死こそ常態

生はいとしき蜃気楼

「リラ」はもう夢と消えて久しいが、「マリー」も今は痕跡もなく消えて、何の変哲もない、近ごろばやりのホテルが建っているだけだ。

「あのマリーも蜃気楼だったのでは？」

最近では歌っていて、ふとそんな気がしてくることさえある。

しかし蜃気楼なればこそ、いとしきはいや増していくようでもあるのだ。

(エッセイスト)